
恋のあとさき 追いかけてる

茶山ぴよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋のあとをも 追いかけてる

【ZPDF】

Z0312D

【作者名】

茶山ぴよ

【あらすじ】

5月迄休載中（お詫びは12話後書きにて） 「カレシ」と
かいつて、ブランドもんとかアクセサリーみたいなもんなんだろ。
女って」 そう言い放つて次々に彼女を替える松浦峻。16才の秋、
沙雪が出逢った彼はしひれるような喜びとときめく時間、そして哀
しみを沙雪に教えた。そして彼自身、恋してはならない人を忘れら
れずにいた……。

1 すべてがそこから流れ始めた

何十回のセックスより、たった一回のキスが忘れられない。

気がつくと、いつもあの人の夢を見ている。

時間はいつも、16才のあの2学期に戻っている。

今までの悲しかったことは、全部夢だつたんだ。

あたしたちはこれからなんだ。

これから一歩ずつお互にわかりあって近づいていけばいいんだ。

あたしが安心して、あの人の名前を声にしようと思つたとたん:
…アラームがなる。

冷たい朝の中に、あたしはあいかわらず取り残されている。

心がねじれるような悲しみも。

ただの青空がせつなくなるような喜びがあることも知らずにいた

最後の日。

あれは 夏休み最後の日だった。朝から台風が通過したあの日。

十年間で最大級、といつてていたわりにはそれほどでもなかつた。いつもそうだ。すごい台風が来るぞ来るぞ、と脅かされるわりには、いつも肩すかしを食わされる。

「そんなにいきおこよく引つ張つたら、ガラスが割れりやつわよ」

「はーい」

母に注意されて三次沙雪みよっさんさゆきは、家中のガラスに張り付けたガムテープを慎重にはずしていた。

台風の接近が予想されるたびに、沙雪の「ひでは」ひやつてサッシュ窓にガムテープを貼りつける。

風のいきおいで何かが飛んできてガラスが割れたときに飛び散るのを防ぐためだが、一度も何かがあたつたためしもなしし、お風呂に汲んでおいた水を使つたためしもない。

台風が来る前に、英國旗みたいな模様でガムテープをガラスに張り付けたり、カップラーメンを準備しておくのは楽しい。

うなるような風の音、窓に叩きつけるような雨も、遊ぶ予定をえなければワクワクするイベントだ（学校がある日だったら、確実に補習を休めるからさらに嬉しいのだけれど）。

でも、何事もなく通過した後でベタベタしたガムテープを跡を残

さないよつにはがすのは、ただただ面倒くさい。

ガラス窓は家中にまだ何枚もあつて、沙雪はうんざりした。

ちなみに父は台風の勢いがおさまった午後から出社しているから、母と一人で後始末をしなくてはならない。

いや、母は夕食の支度にとりかかつてしまつたから、家中のガムテープをはがすのはいつのまにか沙雪の役目にされてしまった。

ため息をつきながら、父の部屋のガラスに取り掛かひとつしたとき、沙雪の頬に、金色の光線が降り注いできた。

田をあげると、ついに厚い雲が割れて、そこから夕日が差し込んでいるところだった。

「キャン！」

振り返るとパグ犬のぐつ太がリードをくわえてしつぽを振つていた。

友達のレイコにいわせれば『情けないカオの犬』だが、今は目がキラキラしている。ぐつ太にも台風が行つてしまつたことはわかっているのだ。

「やつだよねー。散歩にいかなくっちゃねー」

沙雪はぐつ太を抱き上げると頬ずりした。ちょっとぴり犬臭い。だけど沙雪には懐かしい匂いだった。

「お母やーん、ちよつと、ぐう太の散歩に行つてくるねー」

ちよつと沙雪、ガムテープは? といつ母の声を残して沙雪は金色に染まつた外に走り出た。

何か、キラキラしたものに出会える予感 漠然としたものだけど が沙雪の足取りを軽くしてこた。

「ぐう太、ちよつと待つてよー。あんた、はつきりすうせー。」

沙雪はぜこぜこと息を荒げてつなだれた。

ぐう太は『グズー』とからかうように振り返るとキヤンーと鳴いた。

長い人工の砂浜が続く浜は、ぐう太お気に入りの散歩コースだ。沙雪のマンションからここまで歩けば15分かかる。

名前通り朝からぐうたらしていたくせに、ぐう太ときたら、早くここに来たいばかりに沙雪が小走りになるばかりの速さでリードを引っ張り続けたのだ。

明日から9月とはいって、べつたりした暑さの中、競歩かジョギングを強制された沙雪は「もーだめ……」とぐう太のリードを離した。

「こならぐう太も沙雪もよく知つてゐるし、パグのぐう太が人に危害なんか加えないのはわかつてゐる。

よつやく息が整つて、背筋をまつすぐにしてみると沙雪は、目の前の光景に思わず声をあげた。

「うー。雲が燃えてるみたい。

厚く空を覆つていた雲の下から顔を出したオレンジ色の夕陽は、今まで雲に隠されていた仕返しどばかりに、雲全体を黄金色に輝かせていたのだ。

そしてその下に広がる海もまた、波を金色にキラキラと照り輝かせていた。

「きれい」

予感はこんな美しい風景に出会える暗示だったのだらうか。

沙雪はすっかり息が整つたにもかかわらず、じばらく黄金色からピンクゴールド色に変わつていく空と海に見とれていた。

振り返ると、このM浜に建つガラス張りのタワーを初め、海浜ぞいに建つビルも同じ色に輝いていた。

沙雪が生れたのは名前の通り北の街だけど、砂浜のすぐそばに未来都市のようにガラス張りのビル群が立ち並ぶこの街の風景は好きだった。

じばらく見とれていた沙雪だったが、あんまりぐう太を放つてお

いてもいけない、とぐう太が走っていた方向に歩きはじめる。ちゅうどタ空が照り輝いている方向だ。

といつてもたいして心配はしていない。

「この道を西にまっすぐに進むと大きな川の河口に出る。河口に添うような堤防はそのまま防波堤となつて海に突き出でてゐる。道はそこまでなのだ。

太陽はどんどん赤くなり……触つたらやけどしそうな色になり、雲はピンク色の綿菓子のような色になった。

「うん。綿菓子とも違つ。それ自体が発光しているようなちよつときついピンク。

あんな色のネイル、いいなあ。

再び見とれそうになつた沙雪は、最終地点である防波堤の上を走るぐう太を見つめた。

どんなマニュキアでも出せないような光輝くピンクを背に、短い脚で必死でちょこちょこ走るぐう太のシルエットは可愛くて……思わず沙雪は微笑む。

「真に残したい。携帯を取り出そうとして、ぐう太の短い鳴き声にハツとする。

見るとぐう太は防波堤の先端に腰かけている人に興味を示したらしい。親しげにしつぽを振つてゐるのが見える。

いけない。

飼い主である沙雪にはいとおしゃいぐう太だけ、他人はわからない。もしかして犬嫌いかもしない。

沙雪は走った。防波堤の上、ぐう太が向かっていった一番先に向つて走る。

台風の影響か、防波堤に上ると案外風が強い。沙雪は暴れ始めた髪を押さえた。

一番先にいるのはびひやら若い男のようだった。

やや背を丸めたシルエット。

長くはない髪の毛が強い風にあおられて、逆光できりきら輝いていた。

煙が同じように輝きながらたなびいていると、煙草を吸つているのだろうか。

どうやら突然やつてきただぐう太を邪魔にするようでもない。

ぐう太は、その男の横にちやつかりと座つてしまふを振つていた。

「す……」

うちの犬が、すいません。

儀礼的な謝罪の言葉は、沙雪の中で行き場をなくした。

それほど、整った横顔を持つた男だった。

いや、横顔だけでない。

沙雪は確かに見てしまったのだ。

ぐつ太の隣に腰かけていた若い男の頬で、筋になつた涙が空と同じ色に光っていたのを……。

涙をたたえた瞳が、夕陽の色に輝いて……でもとてもなく哀しげだったのを……。

沙雪にとって喜びも、悲しみも、すべてはそこから流れ始めたのだ……。

「サコ、サコってばア。もー

ハツと我に返った沙雪を、蝉の鳴き声のソフレインがシャワーのように包んだ。今日から2学期、つまり秋の始まりだとこいつの、夏休みに入った田とそのボリュームは変わらない。

そして廊下側の窓に肘をついてこるレイコのぶすっとした顔にようやく気付く。何度も呼ばせてしまったのに、うわのそらだつたらしい。

「『』ぬ。何?」

沙雪は謝るとあらためて訊き返す。

「何、ぜんぜん聞いてなかつたのオー、ちゅー。サコのためのハナシなのに」

レイコはぱーっとふくれる風をした。

それももつた。

始業前の朝のひとつき。理系・9組のレイコは、わざわざ廊下を移動して沙雪のこくる3組まで話したて来てくれるのだ。

7月の席替えで沙雪が廊下窓側の席に替わってから、レイコせいうしてたびたび来てくれる。

沙雪が通う高校 学区内でまあまあの進学校であるこの高校は2年になると文系と理系にクラスがわかる。

一見ギャルだけど目の輝きがそれだけじゃないレイコは理系、なんにも考えずラクなほつゝ流れた沙雪は文系に進んだのだ。

沙雪は少しそれを後悔している。

なぜならレイコのいる理系クラスは男子が圧倒的に多いからだ。女子15人につき男子は30人もいるのだ。

それに対して沙雪のクラスは、男子20人、女子25人。加えてこっちにいる男子はややチャライ気がする。

まあレイコにいわせれば、理系もオタクが多いだけ、とのことだけれど羨ましい。

本当は男女の割合の問題よりも入学式からの友達であるレイコと離れ離れなのが何よりも寂しいんだけど。

「何、何？」

沙雪は、レイコに気を取り直してもらおうと、身をのりだした。合コンがどうの、といつていた気がするけれど、本当はあんまり興味ない。

そんなことより……沙雪の頭の中を占めていたのは昨日の夕映えだった。輝く夕陽を映して同じ色でキラキラ光っていたあの瞳。そして涙。

沙雪が田にした中で一番美しい夕映えの中で、それ以上に輝いてみえたキレイな口。

男の子に「キレイ」なんて言葉を考え付くなんて変……。いつも、あの青年の姿を形容するなら「綺麗」としかいじょうがない。キレイ 綺麗 古典風にいえばきらきらしい。

そして、彼は……あんな美しい空の下で、どうして泣いていたのか。

昨日から、気がつくとそのことばかり考えている。

男の子が、夕陽を見ながら泣く理由……よほむつりこことでもあつたんだろうか。例えば失恋とか。

「……明日ね、実力テストが終わったら、合図あるからあぶない。また聞き逃すところだつた。沙雪はからつじて思考を田の前のレイコに残すことができた。

「えー。相手はー？」

「男バス。みんな2年だよ」

男子バスケット部。確かにみんな背が高い。下級生に人気ある。でも、ぶつちやけ興味もてない沙雪だ。

「ふーん。レイコくるの？」

「あたしがいかなあや、サユ来ないでしょ」が

「ゲー。彼びにいひつけてやろー」

「もう知つてゐもんねー。サユのお供だつて」

ベー、とレイコは舌を出した。レイコは近くにある男子校に一つ年上の彼氏がいる。

「ホント、サユのためなんだからね。もうすぐ修学旅行なのに彼氏いない歴まもなく17年でさみしいだらうって」

「ぬせー。よけいなお世話だつてば」

レイコの眞づとおり、沙雪にはまだ彼氏と呼べる人がいたことだが、今までに一度もいない。

「えー、サユつひずつと彼氏いないの？」

見えなーい、と隣の席のアッコが口をはさんできた。でしょー？
とレイコ。

「何人かに「くられてるのに、断つてるんだよー」

「へえー、もてるんだー、サユ」

アッコはマスカラをビシバシつけたまつげでまたたいた。冷房のないこの教室は暑い。朝なのにマスカラは少しだけ下まぶたにじんでいた。

男子だけでなく、このクラスの女子はケバい人が多くて……沙雪はなんとなくついていけずにいる。表面上はまあ、交流しているけれど、表面だけ。

「17にもなるのに、彼氏いたことないなんて、天然記念物くない？」

アツコはケタケタと笑った。「天然記念物く」って、何語。沙雪は心中でちょっととケイべツする。そういう自分だってときどき変な日本語使つぐせに、なんか嫌だつた。

それを聞きつけて、斜め前の席にたむろしていたチャラ男A・Bが

「何、三次さん、彼氏いないのー？」

「うつそでしょ。三次さん、ビジンなのこ」

と寄ってきた。そんな、と言いかけた沙雪は、アツコの様子にハツとした。

「だよねー」と返事しながら、アツコは、沙雪が美人といわれたのがあきらかに面白くないらしい。ケバイ顔から笑顔が消えていた。

「とりあえず、気軽に付き合つてみればいいのに」

レイコがそういつたとき予鈴が鳴り、彼女はあわてて9組へ戻り、チャラ男たちもそそくかと自分の席へ戻つていった。

沙雪は『そんなことないよ』と否定するチャンスを逸した。

今日は2学期の始業式 といつても、沙雪の学校では、夏休み中の8月20日から毎日補習があつたから、あまり夏休みが終わってしまったガッカリ感はない。

昨日の夏休み最後の日も、たまたま週末と重なつただけだ。

その貴重な土日が台風でだいなしになり、がっかりした生徒も多いのかもしれない たとえばデートが台無しになつたりとか。あの「も……彼女とそれでケンカしたりとかかな。

気がつくとまたあの美少年 いや美青年といったほうがいいか……のことを考へてゐる。

「今日ね、転校生が来るらしいよ」

再び脳裏に広がり始めたピンクゴールドの夕映えはアツコの声で遮られた。隣を振り返ると、アツコはさうじてソリと囁いた。

「転入試験満点、しかもイケメンだつて」

よかつた。やつきのこと、あんまり気にしてないらしい。

沙雪はアツコの様子にほつとする。

「へえ。2学期に転校生つて珍しくない?」

沙雪が不思議に思うように、県立である「高校は、欠員がでないと転校生の受け入れはない。しかもそれは年度初めである4月に限定されていた。

「それが、そのコのお父さんがエライ人らしいよ。市だか県だかの」

「へえ」

「なんでもN高校をクビになつたらしい」

「N高校！」

県外にもかかわらず、沙雪でも名前を知つてゐる名門男子校。毎年週刊誌で発表される「東大合格者ランкиング」の上位の常連である学校をクビ、つまり退学になつてここに転校していくとこうのだ。

「アツコ、なんで知つてるの？」

「実はね。あたしの友達の彼氏なんだ。友達はこの女子に通つてんだけど、8月からつきあつて……」

アツコが得意げに続けようとしたそのとき、ガラツと教室前の引き戸があいた。

ドカドカと勢い良く担任が入ってきた。

その後ろに続いた背の高い生徒を見て、沙雪は、あつと声をたてそうになつた。

それは……昨日の、夕陽を受けて泣いていたあの彼だったからだ。

あのとれ。

あの茜色の防波堤の上で。

彼の視線は、沙雪に駆けよるべう太に引き寄せられたように、二
ちらに向いた。

そのまま 彼は咥えていたタバコをもみ消し涙をぐい、とぬぐ
つた。

田がくらむような夕映えを背にした逆光の中で、彼が涙を流して
いたことは、沙雪だけが知る幻になってしまった。

彼はそのまま立ち上ったから、思わず沙雪はあとじをつする。

それほどの背の高さだった。

それきつ沙雪と田も合わせざるに、横を通り過ぎた。

すれ違つ一瞬、潮の匂いが乱れて……苦い香りが残つた。

それで沙雪は我に返る。

それまでずっと息を止めていたみたいだった……。

「三次さん、三次さんつてば」

沙雪はハツとした。

頬にビコビコくるような重低音がリズムをきせんでいる。

覚えのあるリズムは最近流行っている曲。

「ハイ」とすかさず差し出された分厚いリスト。これはカラオケだ。
そうだった。

試験が終わって、バスケ部の男子と合コンにきているのだ。

男子クラスの子が5人、それと沙雪をはじめ、彼氏のいない女子
4人+。

いかにも、もつつか用足りずに迫った、修学旅行前の付け焼刃合
コン。

「三次さんは、ふだん何歌うの?」

男・女・男・女の順で座っているから沙雪の隣にも男子がいる。

体が沈むようなソファだから、隣のその口とは膝が触れあいそう
だ。

顔立ちはまあまあ。バスケ部だからすらりとしているし、服とか
髪型がおしゃれだから、パツと見イケメンにみえる。

でも、近ずまい。

沙雪は、その口の頬にこくつかある、ニキビあとを少し嫌だと思つた。

あの涙が伝つていた頬には、そんな瘢痕はなかつた気がする……。

それに、ちよつと香水がキシく。

沙雪は車酔いの前兆のよつた錯覚に一瞬みまわれた。

「歌、ヘタだから」

「ふーん。そいつ」

男子は沙雪の素氣ない返事を聞くなり、ぐのっと反対側の口に振り返つた。

あまりにわかりやすい行動は、少し腹立たしくも可笑しくもある。

沙雪は、まあいいや、とテーブルの上のウーロン茶を手に取つた。

あいにぐ、じつに氷ばかりのそれに飲める液体はほとんどなくて、沙雪は大きいばかりのグラスを傾けた。

「あ、三次さん、なんか頼む？……俺もたのも」

低いテーブルの向かいから、レイコと話してた幹事役の口が気をつかつてくれる。

たしか、バスケ部2年でリーダーの古田くんつていつたつけ。眉がちょっと下がつていて童顔だけど、優しいヒトだな

でもたしか、レイコによれば彼女がいるって話だった。

彼女いるのに、友達のためにわざわざこんな会を企画するなんて、きっと性格もいいんだ、と沙雪は田星をつける。

「そういうばや、三次さんのクラスに松浦くんつて転校生来ただろ？ すっげーイケメンの」

古田芳樹は、アイスカフュラテを沙雪に手渡しながら笑った。

「俺、同中なんだ」

一瞬……！ じゆの中を見透かされたような気がした……。

昨日。

『松浦 峻』

先生が黒板に名前を書いている間も。

「H県から転入してきた松浦 峻君だ。まつうらひでじゅんみんな仲良くな。……わからないうとがあつたら学級委員の くんに聞いてください」

黒板から振り返った先生が、型どおりの紹介をする間も。

彼はつまらなそうに教壇に立っていた。

いや、つまらなそう、といつ不満を含む「アンスでなく。
もつと……気が抜けたかんじの……そり、心うるさうといつ
た言葉のほうがふさわしいかもしれない。

先生ようつ頭ひとつも上にある顔は完全にそっぽを向いていて、耳
たぶにあるピアスだけが教室の面々に向つて光を投げていた。

その態度は見よつては不遜とせえいえるもので、とにかく
「照れ」とか「緊張」といった転入性にありがちな表情は彼の顔
には浮かばなかつた。

だけど、その整つた顔立ちゆえに。

女生徒が多い、この教室の生徒たちのざわめきは、反発とは違つ
た色合いを早くも帶びているよつだつた。

「静かにしなさい。……じゃ、松浦くん。自己紹介をしなさい」

先生にうながされて、彼はよつやく視線を新しいクラスメートに
向けた。

自然に、いつたんざわめいたクラスが、静まり返る。

「……松浦です。よろしくお願ひします」

その低めの声は、沙雪の腹のそこをふるわせるかと思つた。

そして……彼が自分を見つけるのではないか、と恐れる。

そう。あのとき、沙雪は確かに恐れていた。

恐れながらも……彼はきっと自分に気付くだらうと思つた。

だつて、出会つたのはあの一瞬だけだつたのに 沙雪のほほは
彼をすぐわかつたのだから。

声に触発されたよし、心臓が、体を重く震わせる。

その振動が表に出ないよし苦しみながらも、沙雪は彼を見ずには
いられなかつた。

だけど、彼は気付かなかつた。

彼は一番後ろの席につくために沙雪の横の通路を通つた、それな
のに。

彼が沙雪に気付いた様子は、まったく見られなかつた。

沙雪は息を凝らしたまま、祈るように 彼が横を通り過ぎるの
を待つていた。

「あ、松浦くん」

ちょうど、沙雪の横に差し掛かつた時、彼は先生に呼び止められ
て立ち止まつた。

背の高いガクランは、威圧感の塊のよう沙雪を上から圧倒した。
沙雪はさすがに沙雪もいつむいていたけれど……見なくても
感じられる彼の気配に、鼓動は最高潮となる。

「ピアスは校則違反だ。はずしなやー」

「……ハイ」

意外なほど素直に、沙雪の横で立ち止まつたままの彼は耳たぶに
手をやつた。

昨日の、苦い香りが降りてくる。

雨にぬれたアスファルトのよつなそれが……沙雪にはすでに切な
い。

「あいつ中学の時、同じバスケ部だつたんだ」

「へえ。背高いもんねえ」

相槌を打つレイコは、さつき3組に遊びに来た時に松浦峻を見ている。

どうして古田芳樹が今ここで彼の話をするのか。

まさか心を見透かされては、と沙雪は気が気がでない。

合図はカラオケに盛り上がるグループと、転校生・松浦の噂話をする芳樹・レイコ・沙雪に分断されていた。

会話はときおり大音量の歌に妨害される。

だけじゃんなカラオケの重低音の中でも、沙雪の中では心臓が違和感となつてしまきりに主張する。

まだ沙雪の気持ちを知らないレイコは、せりに松浦がイケメン俳優のY・Tに似ていると付け加え、沙雪に同意を求めた。

「んー、似てるかもね」

沙雪はできるだけせりげなく答えるのに骨を折った。

「Y・T? それはちょっと褒めすぎじゃ」

芳樹は一瞬おおげさに顔をしかめてみせると笑った。笑うと眉がさがつてますます童顔になる。それは彼の優しさを表すようだった。

「ね、やつぱ中学の頃からモテてたの？」

レイコの声に、思わず沙雪は耳をこじりす。カラオケの中の会話はときどき露き取りづらいから。

「んー」

芳樹は一瞬考え込んだ。

「モテてた……かな」

答える芳樹が微妙な表情を浮かべたことについて、このときは氣付かなかつた。

「かな、って何よ」

「そだな。……モテてたよ」

「やつぱりねー。彼女とかいるんでしょ」

「まあ……、俺は知らない」

「いなかつたらチャンスじやん」

そういうでレイコは沙雪を振り返った。まさかそう来るとは思わなかつた。沙雪の体は反射的に硬くなる。

「な、なんであたしのまつを見るのよ」

からうじて言い返す。カラオケが暗くてよかつた。明るかつたら顔色ですべてバレているだらう。

「だつてイケメンだし。モデルやつてる沙雪と絶対お似合いだよ」

「それは、関係ないし」

沙雪はできるだけせりげなく 今度は、そもそも細な」とのよう
に否定した。

「俺、知つてゐる。三次さん、こないだ雑誌の花火特集でモデルやつ
てたんだよね」

香水の香りがふつと強くなつた、と思つたら沙雪の隣にいたパッ
と見イケメンの「がこつてのまにか話にわりこんできていった。

「えーモデルう！ 三次さんモデルやつてるの？」

芳樹の目と眉の間隔が広くなつた。

曲の切れ目だつたせいか、カラオケに興じていた連中の注目も集
まる。

「や、叔母が編集やつてるから。それで無理やつこ……」

沙雪はあたふたと、言い訳じみた説明をしなくてはならなかつた。

母の末の妹にあたる叔母の由利子は、地元タウン誌の編集部に編集兼ライターとして出入りしていた。

沙雪はときどき、彼女に呼び出されて、あて名書きや電話確認などの手伝いにこまき使われる。

まあ、その分お小遣いをくれるから、沙雪としても助かつていたのだが。

その花火特集のモデルも、そんなお手伝いの1つのようなものだつた。

最初はちゃんとモデル事務所に頼んでいたらしいのだが、その本職のモデルのうちの一人にドタキャンされてしまつたらしい。

『お願い。沙雪ちゃん！ バイト代出すから』

いきなり電話をかけてきた由利子に泣きそうな声で頼まれて、それで沙雪はしぶしぶ浴衣を持ってスタジオに向かつたのだ。

「俺、俺、その雑誌見た。結構大きく載つてたよ」

タウン誌の花火特集だから、似たよつた花火の写真に開催日のリストという単調なレイアウトになる。

その誌面を少しでも賑やかにするためだらうか、さもざまなポーズの沙雪ともう一人のモデルが切り抜きで散りばめられていて沙雪はかなり恥ずかしかつた。

編集の人は、

『沙雪ちゃん、本職のモーテルに登録すればいいのに』

なんて軽口をたたいたが校則ではバイトは原則禁止になつていてる。

それに経験上、田立つことに懲りてゐる沙雪だから、できるだけ騒がれたくなかつた。

そんな沙雪の気持ちも知らずに、隣の男　たしか杉本といつたはまだその話題を続けている。

へえ、すごいね、などといつてゐる他の女子がしらけていないか、沙雪は恐れた。

「いや、本当にたいしたことないし。単なる読者モーテルみたいなもんだから!」

沙雪はやつこつと、トライに立つた。

少し席をはずせば話題は歌と一緒に流れしていく。そんな計算からだ。

さすがの大音量の歌も、トライに届くのはわずかだ。

そんな静けさの中で、沙雪は、しのびよる想い出に少しだけおびえる。

中学の時に　ほんの少しだけど　ハブられたことがあった。

『ちゅうときれいだからって、調子のいいてる』

そんなつもりはあるでなかつたの。』

たつた一人で食べる給食。誰も仲間に入れてくれないバレーボーラ。

そんなに長い期間ではなかつたけれど沙雪は十分に傷ついた。

あんな思いは、もうたくさん。

高校に上がつた沙雪は、そういうことがないよう極力氣を使つてきたのだ……。

結局合コンは、沙雪にはなんの収穫もなかつた。

氣の合ひの何人かは、このあともカフュにいつたりするみたいだつたけれど、沙雪は帰ることにした。

「じゃ、あたしも一緒に帰る」

レイコがそつこつと沙雪は心からほつとした。

昼間は夏のように暑いのに秋の日は短い。もう西の空は赤く黄昏て、街にはどうにか灯りがともっている。

自転車を押す腕のあたりに沙雪は秋の気配を感じた。

「サユ、杉本クンに気に入られてたね」

「やうかな

じつでもいい、と沙雪は思つ。

「付き合おうとしているからもよ」

「……」

おとついに比べるとそれほどでもないけれど、赤く焦がれるような秋の夕空に沙雪は目をあげる。

そんな美しい空をみてなぜか切なくなるのは、さつきまで隣にいた男のせいでは、決してない。

話題を変えようとしてレイコを振り返つたはすだつた。

沙雪の視線は、ふいに何かの強い引力に引っ張られるよつこ、流れた。

レイコも沙雪につられてそつちを見る。

かなり暗かつたけれど沙雪にはすぐにわかった。

既視感のよつこ。^{デジャビュ}

沙雪が夕陽の中を見た彼

松浦峻が一歩一歩と歩いてくる。

じから歩いてくる松浦峻は、やはり沙雪に気づいていなこよつだつた。

沙雪は思わず息をするのも忘れ……歩みを止め。

そして、大きく息をつく。落胆の吐息。

松浦は、同じ年齢の女の口の肩を抱いていた。

「……彼女かな。スゴーイ」

レイコが囁く。

何が『スゴーイ』って。

松浦とその彼女が出てきたらしき路地のむこうには、ホテルがあつたから。

ピンク色のネオンが、暗くなり始めた路地を隱微な色に染めている。

お互い私服だからか、松浦は沙雪に気づかないようだった。

松浦は沙雪の知らない表情を浮かべて、沙雪の横を通り過ぎて行った。

沙雪が知っている松浦の表情は。

夕陽の色に染まつた瞳と涙の筋を浮かべた哀しげな顔。

そして、心をビームに置いてきたよつな、けだるい顔。

教室で、昨日も今日も。

松浦の顔は　誰に話しかけられてもどこかけだるそな感じだった。

脱力感、のよなものが常に漂つていたのを、沙雪は田の端でとらえていた。

それが今は。

女の子の肩を抱いた松浦は軽く笑みを浮かべている。

その笑い方を、沙雪はなぜか嫌だと思つた。

沙雪は一人が通り過ぎるまで、立ち止まつたままだつた。

夕風が半そでにしみて、よつやく我に返る。

レイコが不思議そつに見ているのに気づいて、沙雪は笑顔をつくる。

「……いじつか

レイコの手前、何気なくふるまいながら沙雪の心は動搖していた。

『ばくばくとのたうちまわる心臓が、苦しい。』

『あれが、アツコちゃんのこってた彼女かな』

『……たぶんね』

せつめ、レイコが3組の教室に遊びに来た時、松浦の話題が出た。昨日から今日にかけて3組の女子で、松浦の「わせをしなかつた『など、たぶん一人もいないに違いない。』

『松浦クン、あたしの中学生のときの友達と、付き合ってたんだよ』

そのアツコの友達で、女子学園に通つているコと、夏休みに入つてから付き合いだしたばかりらしい。

おそらく　松浦とさつき崎つ添つていたコはその子に違いない。

でも、それじゃない。

沙雪が苦しいのは、松浦が他の子と寄り添つていたからではない。

アツコが『松浦の彼女』の話をしたときも、沙雪は別に苦しくなかつた。

むしろ、あれだけのルックスなら当然だと思つた。

そのあと、沙雪が思い出したくない話題が、記憶にからみついたようにつながつてくる。

チャイムが鳴つてレイコが9組に帰つた後も、噂話は先生が来るまでの間、続いていた。

そのときニアッコがさつきより声をひそめて耳元で囁いた。

『でもね。この女子の別の子によれば、松浦クンって有名なヤリ××らしいんだ』

『え?』

沙雪の田の端はあいかわらず、松浦を確認している。

松浦は脱力感を漂わせながら、頬づえをついて窓の外に視線を遊ばせていた。

『松浦クン、GWあけからほとんど毎日うちに帰つてきてたらしいんだけど……それがさ、彼女がころつころつ変わつてんだって』

ころつころつ、とリズムをつけて語つたアッコは、瞳を沙雪の方に寄せて、意味深に口角をあげる。

『それが、ヤツたら捨てるつてパターン。1ヶ月で女を変える男で有名なんだって』

『なにそれ』

「うそー、信じられない。と話にノリながらも、沙雪は本当に信じられなかつた。

沙雪の中にいる松浦は、あの夕陽の中の哀しげな涙。

ヤリ××だの、ヤツたら捨てるだの、生々しくて下劣な雄的行動オスと、あの夕陽にまつめにいた涙は、沙雪の中でビリしても結び付かなかつた。

それが、今。

裏付けられてしまつたのだ。

「……こやじりしこ。サイテー」

思わずつぶやいてしまつたのが、レイコに聞こえてしまつたらし
い。

「何が?」

レイコが不思議そうな顔をして沙雪を見た。

レイコは、あのあと組に帰つてしまつたから松浦の最低な風評
を知らないのだ。

いつもなら面白おかしく、かつ詳細に噂を伝えて、一緒に

『信じられない。』

と叫ぶところだが、そんなことをする気も起きなかつた。

そんなにまで落胆してしまつた自分が、また何を期待していたのか、そんな自分が腹立たしいとさえ思つ。

「……高校生のくせに。ホテルとか入つたりして

沙雪はただそう答えた。

不思議そうに沙雪を見つめていたレイコの瞳が、少し涼しげに細まる。

「……ホテルはちょっとアレだけビ、別にいやいやじゃないんじやない？」

意外な返答は、淡々と帰つてきた。

沙雪はレイコの顔に真意　たとえばキツイ冗談とか　を見よ
うと自転車を押す手を止めて田を凝らした。

そこにはなぜか、憐れみのよつなものが浮かんでいる気がして、
沙雪はあせる。

「つもあつてたら、別に普通のことじやない？」

レイコはもつて一度黙つと、自転車を押して先に進んだ。

レイコも、こつま。

いつのまにか、自分が取り残されていること~~に気がついた~~沙雪の行く先に、極彩色のネオンが小さくまたたいている。

「待つて。レイコ」

それはあの日の夕陽よりもけばけばしくて。

沙雪は苦い唾液を呑み込むと、下を向いて、自転車を押すのに集中した。

だめだ。ぜんぜん楽しくない。

沙雪は隣にいる杉本に『氣づかれない』ようにそっとため息をついた。
スクリーンの中には、じばじば静かな夜が訪れて、闇が密席を飲み込む。

そのたびに沙雪の中では、警報が鳴り響くのだ。

もう少しで沙雪に寄りかかりそうなほど、肩を寄せてきている杉本。
彼の方をみなくとも、体温と香水のにおいでわかる。

香水の匂いは、しづしづ息をとめているひびに慣れて来たからまだいい(いやだけど)。

だけど、肩のあたりから放熱される体温は、沙雪の領空へ侵入してきそうだ。

生々しい体温 沙雪はむしろそれを警戒した。

もしも、これが好きな一人なら。

迷わず肩を寄せ合つのだらう。

現に、スクリーンが明るくなるとそこにはカップルたちのシルエットも浮かび上がる。

暗い映画館の中は、適度に人目を避けられるからだらう、大胆にくつつきあつカップルもいるほどだ。

沙雪は、といえば。

進んで肩を寄せ合つほど、隣にいる男子が好きなわけでもない。

『一緒に行動しているうちに、ことじりが見つかることもあるし』

誰かがいつたように、今からこの「好きになれるのだろうか。

いまの沙雪には、そんなこと考えられない。

せつかとこつて、あからさまに反対方向へと避けるのはあんまりな気がする……。

だから沙雪は、シートの中央にまっすぐにはじめに座り身を固くしていた。

それはひどく疲れる。

案の定、映画の内容はまったくへつてない。

やつぱり断ればよかつた。

つこに沙雪の心はまつと後悔の形をとつはじめた。

つからずぐつ太とでも遊んでゐたのがよつぱりよかつた。

寒いとか、ぐつ太を抱つてあるとあつたかい。

いきもののかわらかい感触。ぬくもり。

……冷房の効き過ぎた映画館、肌寒い沙雪は、今それがとても恋しい。

「……が、生まれて初めてのデートか……。」

沙雪はもう一度ため息をついた。

あの会員への窓口。

沙雪は、隣にいた杉本といつ男子に試写会に誘われた。

「試写会の券をもらつたんだ。よかつたら行かない？」

男子クラスの杉本は、沙雪の所にわざわざやつてきて誘つてくれたのだ。

さすがに学校では、あの香水の匂いはしなかつた気がする。

「やつぱつ……やつたじやん」

レイコは沙雪の肩を叩いたが、沙雪はあんまり乗り気じゃなかつた。

「杉本くん、まあまあイケてるし。気軽にこつてくれればいいじゃん。タダだし」

「アッコもわかつて、レイコと「ねー」と笑った。

「でもや。あたし、男子と一人で『でーと』みたいの行つたことないんだよね」

だから、行きたくない、と沙雪は暗に言つたつもりだった。

それを聞いたアッコやクラスの女子は驚いていた。

「えー、サコつて、デートもまだなおー!」

「だつたら行つたほうがいいよ。気軽にこむ」

沙雪が彼氏いない歴=年齢だと知つたクラスの女子は、寄つてきて我も我もとアドバイスを始める。

彼女たちのこつことはたぶん、もっともなんだか、と沙雪も思つ。

だけど沙雪は……気づかれないよつ、ちうつと後ろに田を走らせた。

あいかわらず一番後の席に座つてぼんやりしてこるよつな松浦。

その姿を田の端に捉えたとたん、昨日の姿を思い出す。

女の子と寄り添つて、ピンク色の路地から戻ってきた姿。

「いやらしこ。あんな人関係ないじゃん。」

そんな考えが浮かんだそのとき。

「松浦くーん！」

後ろから男子の声がした。

胸の中を見透かされた気がして、沙雪は思わずジクついた。だがすぐには

「あ、古田クンだ」

とレイコの声がして反射的に後ろを振り返る。今度は田の端でなく、ズリズリ立つ。

昨日の合コンにもいた古田芳樹がバスケ部だらうかもう一人の男子と、後ろの出口に立っていた。

それに気付いた松浦は、

「あ」

と表情を和らげると、のつそりと立ち上がった。

「わわしふりじゅん……」

などと話しているのが聞こえる。

そういえば昨日の合コンで、古田は松浦と同じ中学だったと言っていた。

あの一人は仲がよかつたのだろうか。

キャプテンの古田がやつてきたので、3組のバスケ部在籍の男の子も加わり4人で立ち話になつた。

「意外だねー。あまりしゃべらないと思つてたのに」

アツコがそつとつぶやく。

主語はないけれど、もちろん松浦のことだと沙雪にはわかる。

教室の中で、確かに違和感のあつた松浦だが、一いつやつて4人でしゃべつている姿は、普通の男子高校生だ。

いつのまにか、松浦は笑顔になつていた。

「冗談でも言い合つてているのか、笑い声さえ聞こえる。

」んな顔もするんだ。

沙雪は意外だつた。

その笑顔には……昨日の女の子に向けた笑顔のような嫌悪感を、沙雪は感じなかつた。

いい顔だ、と思つ。

夕陽の中の哀しげな顔はただ、美しかつた。

だナビ、今の顔のまゝがずっとここ。

「やつぱわ、いじつてゐるといつかひるよな」

レイコも感嘆してくる。

「でも彼女こるしー」

アッシュの声は、沙雪がキラッとして振り返った。

……彼女は、エレガントと沙雪の様子を見ていたようなんだ。

「杉本くんだって、まあまあじやん。上級生にモテるよ」

アッシュの声は沙雪に釘を刺してくるよいひに思えた。

「一緒に行動してこるひが、ここというのが見つかることもあるこ

「アッシュ。ドートーだけで、付合ひてわけでもなこ」

まわり女子の声も沙雪に戻ってくる。

そんなわけで、沙雪は成り行き上、土曜日、杉本とドートーはまになってしまったのだ。

「ほんとうに来るの、はじめて」

沙雪はあたりをキョロキョロと見渡す。

7時前に映画が終わって、杉本は夕食に沙雪を誘つた。

『美味しくて面白いお店のタダ券があるんだ』と杉本が誘つたその店はたしかに個性的だった。

暗い中にぼんやり浮かび上がる行燈と、それを反射する池。

建物の中にあるの、その店のフロア全体が池になつていて、席へは飛び石を渡つていくのだ。

一つ一つが独立して池に浮かぶようになつている席は、紗のような薄い布で仕切られている。

そう、由利子のオフィスにあつた雑誌で見た、リゾートホテルの天蓋つきベッドみたいな。

藤とオフホワイトの帆布で作られたソファーになつている席も、いかにもそれっぽい。

それは周囲の視線から席の中をほびよく遮つていて……気付くとどうやら他の席はカッフルばかりのようだった。

どうやら南の島にある、海上に浮かぶ「テラージュを意識した店のつ

くつ…… もうひと高校生の沙雪にはそんなことまでわかるはずもない。

ただ、周囲の視線から遮断された沙雪は、再び緊張に身を固くした。

杉本はといえば、

「何にしようか」

と一つしかなじメニューをこころとに体を寄せてくれる。

この場に焚かれているお香に杉本のつけてくる香水がまじる。

その「つか慣れるかと思つたけれど、やつぱり無理かも。

沙雪は心の中でそつとため息をつく。

そもそも、映画だけ見たら、帰るつもりだった。

それが、夕食に付き合つてしまつたのは。

もちろん『タダ券があるんだ。付き合つてくれない?』と頼まれたところもあるけれど。

よく冷房が効いた映画館はかなり寒かった。

身を固くしながら沙雪は、知らず知らずのうちに血の腕を抱くようにしていたらしい。

鳥肌がたつているのが自分でもわかる。

映画の半ばで、それに気付いた杉本は、

『ひょっとして寒い?』

と小声で訊いてきた。沙雪は

『大丈夫』

と答えたのだが、杉本は着ていたパーカーをおもむろに脱ぐと

『これ、肩にかけとけば』

と差し出した。

『え、いいよ』

沙雪は遠慮したが、杉本は『いいって』と笑顔で、有無を言わせずにそれを沙雪の膝の上に乗せた。

膝の上のパーカーには杉本のぬくもりがほんのり残っていて……沙雪は戸惑う。

拒否したい気持ちよりも、

優しいところもあるんだな。

パークーに残るぬくもりは、沙雪を少しだけ温かい気持ちにさせた。

そして思い出す。あれはサッカー部だつただろ？

高一の時、同じクラスにマネージャーをやっていた「がいた。

冬になると彼女は、先輩から借りたんだある「ジヤージをいつも制服の上から羽織つて練習につきあつていた。

その「はたぶん、その先輩が好きだつたんだと思つ。

彼の服を羽織るのは、その人の優しさに包まれているような気がしてんだらうな、と沙雪は想像する。

そんなふつに杉本の優しさこころのまつたいわけでは、今の段階ではない。

だけど、差し出された優しさは、確かに沙雪を温かい気持ちにさせた。

そしてクラスメートの言葉が心に再び浮かび上がる。

『一緒に行動しているうちに、ことじうが見つかることもあるし

そうだ。

もつ少し一緒にいたら、もつといといといが見つかるかもしねない誘われたとき、沙雪はそう思つたのだ。

もつすぐーフオになるのに、彼氏がない沙雪。

それに対して、周りはみんなどんどん大人になつていく。

いろいろなことを知つていく。

そんな状況への焦りもあつたのだけれど。

だけど、再び沙雪は後悔している。

運ばれてきた料理は、沙雪が食べたこともない趣向が「ひられたものばかりで……杉本に連れてこられなければ絶対に食べられないようなものばかりだった。

味も、ときどき『粗い過ぎ』な傾向にあつたものの、そこそこ美味しい。

だけど……。

「三次さん、ずっとモーテルとかやつてるの?」

「また出たらいいの?」

「あの本出でから、モテたでしょ?」

……それを話題にすれば沙雪が喜ぶと誤解しているのだろうか。

杉本が話題にするのはそのままばかりで沙雪は閉口した。

それに、いつやって一緒に食事をしてみてわかったのだが……杉本の食べ方はあまりきれいではなかつた。

歯並びが悪いのも気になつてゐる。

こんな風に欠点ばかり気になりはじめるのは、やはり好きになれないのだろう。

失望した沙雪の前では、リゾートのよつなインテリアも、凝つた料理もただ味気ないだけだ。

「モテないよ、別に」

「いや、モテてるつて。みんなウワサしてるし。三次さんのこと」

杉本がいるのは男子クラスだらう。

普通に聞けばちょっと嬉しそうなことのばかなのに、沙雪はちょっと胸やけがするような気がした。

杉本はチューハイを飲んでいるせいかよくしゃべる。

車で来ているかどうかはチェックされても、店の人もいちいち高校生とはチェックしないのだ。

沙雪も迷つて『うちこ』『美味しいよ』と同じものをオーダーされてしまつた。

それはたしかに口当たりがよくて、ジュースみたいだった。

やるせない時間を作り過ぎすべく、沙雪はそれを口にするしかない。

「……それにしても、三次さんと一緒にアートできてよかったです」

食事をだいたい食べてしまった頃、沙雪は、杉本はつぶやいた。

そしておもむろに沙雪のほうを振り返る。

アーティストの一枚田を意識したような仕草。

頬が少し赤くなっているのが似合わない。様になつてない。

無理もない。杉本はチューハイを2回おかわりしていたから。

その辺じみた様子がやりきれなくて、沙雪はチューハイを手に取る。

沙雪の方も2杯目が終わるとこだ。

なんとなく、頭の中に霞がかかっているような、空気が重くなつた
ような気がする中で、これを飲んだら帰りを切り出そうと思つて
いる。

「ねえ。三次さん。修学旅行、誰も相手いないんでしょ

杉本が膝を進めてきたので、思わず沙雪はたじろぐ。

彼の体は少し揺れていた。酔っていたのだろうか。

たじろいた沙雪も、ぐらつく感じを覚えた。

「俺じゃダメ?」

やや焦點があわなくなつた瞳が今までの誰よりも近づいて沙雪に注がれる。

沙雪は本能的にささやいて距離を保つとした。

そのたびに、元々ぐらついていた体を置いて、頭だけが2倍も動いたような錯覚を覚える。

杉本が、それなりに自分を真面目に好きでいてくれるのはわかる。

でもさっぱりダメ。

だけど、そのまま『ダメ』と言こきつてしまひほどの非情さを沙雪は持てない。

沙雪がいい終わらなこつちこ、元々ちこちこ迷いながら、沙雪はつなづく。

「いぬ……」

沙雪がいざなり杉本が大きな声を出したので、沙雪はビックリ震える。

「なーんでーー。」

そこをなじ杉本が大きな声を出したので、沙雪はビックリ震える。

「なんでー！ いいじゃん。彼氏いないんでしょ！」

あいかわらず向けられた杉本の充血した眼には、非論理的な怒りが燃えている。

いぐり、男子と付き合つたことのない沙雪でも、この状況がヤバイことはわかる。

「「めん。あたし、この辺で帰るね」

唐突に立ち上がった沙雪だが、腕を引っ張られる。

すごい力……とこより、酔つてぐらついていた沙雪は簡単にバランスを崩し、ソファに倒れるように落ちた。

「三次さん。俺、マジで好きなんだ」

それでも、バネのように身を起した沙雪の肩を、杉本はガシッと掴んだ。

「……やつ。やめて」

沙雪は抵抗したが、杉本は沙雪をソファの背に押し付けると顔を近づけてきた。

たぶん、完全に酔っているのだろう。

ニキビの跡がある赤い頬、充血した瞳、そして分厚い唇がどんどん近寄ってくる。

香水の匂い　いや、違う。

さつき映画館で羽織つたパークーの香水の匂いは、そんなに嫌なにおいじゃなかつた。

香水と、杉本自身の体臭がまじつた匂い。

今わかつた。沙雪が嫌だつたのは、その匂いだつた。

そしてさら」。

アルコール臭い、生温かい息が鼻先に吹きかかる。

「いや！　やだー！」

沙雪は大声をあげて、顔をそむける。

す「」い力。

肩をソファーに押し付けられた沙雪は、身動きすらできない。

せめて顔をそむけるだけ……それがせいにいっぽいの抵抗だった。

「やつ……」

そむけた頬に感じた、アルコールの臭いがまじつた湿つた息。沙雪は思わず目を閉じた。

次の瞬間を、悪夢だと思ったかつた。

そむけた唇の横のほうからくつついた柔らかいもの。

ぶにゅっとした、生温かい肉の感触。

不快さに思わず目をあける。

杉本の顔のアップ。

あまりに近すぎて、妖怪じみて見える顔。

焦点をあわせられるギリギリの距離で赤っぽいニキビ肌を確認した
とたん、ふいに。

その顔が不自然なスピードで視界から消えた。まるで弾かれるよう

「お姫さん。困ります」

押さえつけられていた体が軽くなり……低い声に降り返った沙雪が見たのは、背の高いホールスタッフに後ろから襟首を掴まれた杉本の姿だった。

どうやらこのスタッフが、沙雪から杉本を無理やり引きはがしてく
れたらしい。

「……離せよッ！」

暴れようとする杉本を、スタッフは掴んだ襟首」と放り出すように
した。

テーブルの上のグラスをなぎ倒しながら……杉本が床に投げ出され
る。

ウッドデッキの床が派手な音をたて、池の上に反響した。

天蓋風の薄い布に包まれた、それぞれの席の客も、何事、と様子を
うかがっているのがわかる。

「店内でのトラブルは困ります」

「……ってえ。何すんだよー……あつ」

杉本がそのスタッフの顔に気付いたのと、沙雪が気付いたのとほぼ
同時だった。

うそ。

それは松浦峻だった。

間違いない。

暗かつたけれど。

また、立て襟のシャツに黒く長いエプロンをつけたギャルソン風の姿だったけれど。

……見間違ははずがない。

「おまえっ……！ 3組の松浦だな」

松浦は冷やかな眼で杉本を上から一瞥すると、倒れている彼の腕を引っ張り上げようとした。

杉本はそれをはねのけると、バネの様に飛び起きた。

「覚えてるよー！」

杉本は吠えると、ふりつきながらも飛び石を渡つて立ち去つてしまつた。

沙雪はただ放心したまま それを見送る松浦の斜め45度の顔を眺めていた。

と。

松浦がこちらを振り返った。

恐怖のあまり動悸さえ忘れていた胸が……今頃になつて激しく打ち始める。

「……大丈夫ですか」

何と答えたらいかわからないけれど。

その一寧語が、クラスメートに使われるべき言葉ではない。店のスタッフからお客様に対しても使われるべき言葉ではないことがある。

もしかして松浦は、同じクラスの沙雪のことなど覚えてもらっていないのだろうか。

その整つた顔を見上げながら……沙雪はとりあえずうなづいた。

やはり、松浦に間違いない。

松浦がやってきてから、この1週間。

一度も言葉を交わさなかつたけれど……沙雪は気がつけば松浦を見ていたから。

嫌らしい、とあのピンク色のネオンを思い出しながらも、気がつくと視線が吸い寄せられている。

ひんぱんに遊びに来るよくなつた古田がいるとき以外の松浦は。

たいていぼんやり頬杖をついて、窓の外に顔を向けていた。

その斜め45度の横顔はどうか寂しそうだ。

そう、最近現国教科書の一文に出でた『寂寥感』のよくなもの
が漂つていた。

いや、それは。

古田らじと笑つている時も、常に漂つている気がしたのだ。

だけど。

あんまりじょっぢゅう見てゐるせいが、沙雪と松浦の視線はしばしばぶつかつた。

そのたびに沙雪は……松浦ではなく、松浦の向こうにある窓の外を見ているよくなふりをしてやつす。じつてこののだけれど。

このとじの田たは必ず、田が合つていたのに。

それに、古田だつて松浦の横から「三次やーん、元気?」と声をかけてくることがあつたのに。

松浦は沙雪に気づいていないのだろうか。

松浦は、テーブルの上で倒れたグラスを元に戻しながら、紙ナプキンを何枚か手に取ると、ふいにそれを沙雪の田の前に差し出した。

それが何の意味かわからずに戸惑う沙雪は松浦を見つめるしかない。

「……顔」

「あ……」

松浦の低い声で……沙雪は、自分の顔が涙でぐしゃぐしゃだということに気付いた。

「すいません」

自分のことを覚えているかどうかはおじとい。

松浦が店員としてふるまつて立つながら、沙雪も客としてふるまつべきなのだろう。

沙雪はそういって紙ナプキンを受け取ると、涙をぬぐつた。

知らない間に鼻水まで垂れていたらしい。

恥ずかしい。

沙雪はめだたないよつて鼻をすすつた。

「……三次さんも、もう帰つたら？」

え。

沙雪は鼻をすするのをやめて、再び松浦を見上げた。

今たしかに、『三次さん』って……。

松浦は確かに言つた。

やつぱり松浦は、沙雪を沙雪として認識していたのだらうか。

あまりに意外で、せっかく涙をぬぐつたのに、皿を見開いた拍子に溜まつた涙がまた、ぽろぽろとこぼれおちつてしまつた。

それを皿にした松浦は、つぶやつしたように

「だいたいを」

とため息」と声を出すやつくりした。

「自分が悪いってわかってるの?..」

え?

湿つて丸まつたナフキンで止まらない涙をぬぐつていた沙雪の手が止まる。

どうして、自分が責められないといけないのか、わからなくて。

松浦はそんな沙雪のことなどしかまわずて、テーブルの上をさづけ始めた。

また涙が出てきたせいか、また鼻水が垂れてきて……沙雪は頭の中に湧き出す疑問ごとそれをすすつた。

なんで。

どうして自分が悪いなんていわれないといけないのか。

だいたい、沙雪は被虐者なのに。

いきなり押さえつけられてキスされて。

思い出すと怖くて涙が出てくる。

涙とともに鼻水も湧いてきて……沙雪はぐしゃん、とこつ音を繰り返すしかない。

テーブルを片づける松浦の頭が、少しだけ落ちた。

ため息。そして振り返る。

「……こんな感じに来る」と身体、スキだらけじゃん

整った顔が、心底面倒くさいと金んでこる。

だつて、だつて。

だつて知らなかつたんだもん。

知らずにつれてこられたんだもん……。

心で反論しながらも、沙雪は文句がいえない。

あまつこも、もつとも。正論だとこいつとはわかつてこるのに。涙が止まらない。

もつた紙ナフキンはぐしょぐしょで、もつ役に立たない。

沙雪は涙を手でぬぐつた。

松浦は、トレーの上に皿やグラスを載せながら続ける。

「……男に期待だけさせといて、あげく、ギャー、ギャー、わめいて。みつともね」

もつともだけ……沙雪は泣きながらだんだん腹が立つてきた。

一度も口をきいたことのない転校生に、なんでもここまで言われないといけないのか。

腹がたつのに、涙が止まらない。

全部トレーに載せ終わつたのか、松浦は再び振り返つた。

今度はちょっとバカにしたような視線を放り投げてくる。

「……だいたい、キスくらいで。そんなに泣くようなこと?、減るもんじやなし」

そうだ。

思ひ出せないでよ。沙雪は鼻水」と涙をぐごつとぬぐつた。

はじめての……キス、だつたんだ。

あれば。

あんなやつと。

「減るよー。」

沙雪は叫んだ。

一生に一度つっきりの、ファーストキス……。

あんな形で失つてしまつた。

沙雪のあまりの剣幕に驚いたのか、松浦の顔から非難も軽蔑も消えている。

ただ見開いた瞳の中で、テーブルの上のキャンドルだけが揺れていった。

それを見ていると、また新しい涙が湧き出でてきた。

「帰るー。」

いきおいよく立ちあがつたつもつだつたけれど、体がぐらついて。

まつすぐ歩いつとして……カーテンのよつになつた入口にぶつかる。

頭がフワフワしてうまくバランスがとれない。

それでもかまわない。

沙雪は天蓋に覆われたような席を飛び出した。

席を飛び出して、「」が池の上に浮かぶ席だったことを思って出す。

「おこー。」

飛び石に足を踏み出そうとした沙雪は後ろから肩をガシッとつかまれた。松浦が追ってきたのだ。

「まつとこじょー。」

かまわず振りほどいた沙雪だったが、

「池に落ちるぞ」

と聞いて黙った。

視界がグラグラ揺れて、水面に映る行灯が一重にも二重にも見える。

酔つていなければどうとこいとのない飛び石なのに。

松浦の言つ通り、支えてもらわないといまにもバランスが崩れそうだ。

沙雪は自分が情けないと思つた。

飛び石を渡ると松浦は、沙雪に

「ここで待つてる」

と池のほとりにあるウッドテラスの席の一つに腰かけをせた。

松浦がカウンターの中の人と話しているのが 休憩、とか繰り上げ、とかいう単語が聞こえてきた。

沙雪はテーブルの上に頬杖をつくと、建物の中の池を眺めた。

ここから見ると、天蓋に覆われたような席は、池の上にいくつも浮かぶ大きな丸いドームのようで幻想的だった。

その中では、キャンドルの暗い明りに照らされて、恋人たちの影が揺れている。

沙雪は頬杖をつきなおした 掌に唇が触れる。

びびしても思い出してしまつ。

あんなやつ。

沙雪は唇を手の甲で「ゴシゴシ」とねぐつた。

はじめての……キス、だったのに。

いちおうデートだから、とつけてきたルージュもグロスもすっかりとれてしまつている。

だけど沙雪はこすり続けた。

ひりひりしてくる。

最低。最低。最低。

ひりひりしているのは腹よりも……。

涙がまた出でくる。

「まだ泣いてんの？」

気がつくと松浦が立つていた。でもウザそうな顔。

Hプロンと蝶ネクタイをはずし、シャツをパンツから出しつづけモードらしい。

「ほり、行くぞ」

びつから、松浦は沙雪を送つてくれるらしい。だけど

なんでこんな口の利き方されないといけないの。

「もういいよ。一人で帰れる」

沙雪は手の甲で涙をぬぐつと、鼻孔に逆らひを返してやった。

「じゃ、立てる」

ほれ、立てないだろ。と続をやつな口調。沙雪は挑むよいつに立つた。
わざよつはマシだけど、まだ体の動きに頭の揺れがワントンボず
れたような感じは続いていた。

「行くぞ」

沙雪がびりにか立てるのを見届けぬじ、松浦は顎で出口をしゃくつ
た。

操られているみたいで腹が立つたけれど、これ以上ウザく思われる
のはもつと腹立たしい。

松浦の後をついていつて……沙雪はこの店が地下にあったことを思
い出した。

それほど酔つてゐるんだ、と直覺する。

外に出るとネオンがまぶしきほどだった。

そのピンク色の光が、なんか不快なものを呼び覚ましあつた。

沙雪は口を尖らせながら、前にある松浦の広い脇中から皿をやりし
た。

と、その松浦は振り返った。

「家、M浜のまつだる」

その口調があまつにもぶつかりぱつたから、沙雪は首をブンブン振る。

「違ひ。」町だもん」

あんまり首を振ったので、脳がショイクされてクワンクワント音を立てそう。

そんな中で、沙雪は考える。

M浜。それは、ぐつ太のお気に入りの散歩コース。

つまり、夏休み最後の日は、はじめて松浦に出来たあたり。

やつぱり。

「の野も、あの日のことを覚えてるんじゃないか。

沙雪はぶんぶくれたまま顔をあげた。

しかし松浦はそんな沙雪の様子にはまるでおかまいなしに

「わ。どうにしても、その酔っ払いじやタク（タクシー）だる」

と、なかばバカにしたように、タクシーが捨てる通りくとわざと歩いていく。

「まだ、地下鉄あるもん！ もう一人で大丈夫だから…」

沙雪はムキになつて立ち止まる。

振り返つた松浦は、斜に構えるよつこじて沙雪を見下ろした。

わつかも思つたけれど、じつはみるとずいぶん背が高い。

沙雪も女子では高いほうのこ、見上げるよつだ。

「土曜日の夜、女子バー「セー」がその酔い方で独り歩き。ナンパしてくれつていつてるよつなもんだな」

「……大丈夫、だもん」

「ふーん……」

言つてゐるそばから、後ろからズンズンと胸を振動させながら重低音の塊が近寄つてくる。

沙雪と松浦の横を、ピンクや青のライトでバンパーの下を照らしながらワンボックスカーが通り過ぎていった。

「……キス以上のことされても、俺の責任じやないから

松浦は薄く笑つと、じや、と踵を返した。

むこうから酔つ払つた大学生どうつか、肩を組みながらの一群が歩いてくる。

真ん中の奴が、動物園のライオンより大きな声で吠えている。

怒っているのか、気持ちがいいのかわからないような赤い顔。

沙雪はそつちをみないようつづむいた。

たまにみんなで来る繁華街。カラオケとか。

だけど、こんな夜にたつた一人で、取り残されたことはない。

沙雪は急に恐ろしくなった。

「待つて！」

本能的に、松浦を呼びとめていた。

月曜日。

沙雪は朝補習をさぼってしまった。

登校するなり 沙雪は教室に松浦を探してしまった。

来てない。

わかつていただけれど、沙雪は少し力が抜けた。

進学校であるJ高校は毎朝補習が行われる。

補習と言いつつ全員必修の授業扱いであるけれど。

先週水曜からさつそく始まつた2学期の補習だが、松浦はさぼつて一度も来なかつた。……転校生のくせに。

それどころか、朝のHRすらも、ギリギリにしか来ないとこつ堂々たる態度なのだ。

「おはよー、サユ」

「土曜日どうだつた？ 初テーーー」

席に着いた沙雪に、アツコたちが身を乗り出してくる。

土曜日のパートの顛末は……心配してメールしてきたレイコにしか

話していない。

でも、そのレイコにも杉本に『はじめてのキス』を奪われてしまつた件については、話せなかつた……。

あんなやつに、生まれて初めてのキスを。

好きでもないのに……。

思い出したくもないのに、思い出してしまう。

思い出すと悔しさで奥歯に力が入り……上の歯がひきつりそりこなる。

そのひきつった自らの歯の弾力ですら、嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。

沙雪は唾とともに嫌悪感を飲み込むと

「……うん。こんなもんかな、つてかんじ」

とせっけなく答えた。

あれさえなれば、そんな感想で終わつたはずの、初デート。

「それより今日一限目の英語、あたるかな。あたし、なんにもやつてない……」

と明るく話をそらす。

これ以上、思い出したくないから。

松浦は、まだ来るよつすはない。

沙雪は、アツヒに英語をしゃむらしながらも、開け放たれた廊下の窓を田の端で意識する。

だけど。

そこに松浦が現れたとして。

何といえばいいのだね。

とにかく謝りなくちゃ……いや、お礼をいわなくてはならなこと
はわかる。

助けてくれた」と。

（結果的にキスはされてしまつたが……）

それから、あのあと。

わざわざ地ト鉄の駅まで送つてくれたのに。

沙雪ときたら、ありがとひ、の一言も言わなかつたのだ。

それによひやへ戻ついたのは、翌朝、ずいぶん陽が高くなつてから
だ。

あの翌日、つまつ口羅田、沙雪は最近くに田が覚めた。

少しだることは、一日酔いといつやつだらうか カーテンから透ける太陽は、前日の記憶から感情的な部分を薄めて……冷静に思い出させた。

『待つて。……駅まで送つて』

沙雪の嘆願に、松浦は無言で応じてくれた。

ただ、目だけで『ほら、やつぱり』と一瞬笑った気がした。

馬鹿にされたよにも、優しくよにも見えた瞳は一瞬だった。

松浦は背を向けるとすぐに沙雪の前を歩きだした。

それは結構早足だったから、沙雪は必死でついていかなくてはならなかつた。

駅までの松浦は無言だつた。

いや、たつた一回。

『氣をつけるよ』

ポケットに手を突っ込んだまま、放り投げるよに言つた、ぶつきらぎうな一言。

考えてみたら。

彼がそれを言つたのは、改札のところだつた。

つまり、改札まで一緒にいてくれたのだ……。

それに対し、何て答えただらうか。

まったく思い出せない。

もしかして、うなづいただけかもしれない。

わざわざ、休憩時間を使って駅まで送つてくれたの。

あのとき、『あつがとう』と言つべせだつた……。

思つ出しつづつ。

恥ずかしさと、後悔と。

一気に溶け出してくる気持ちで耐え切れず、沙雪は再び夏布団の中にもぐもぐとむづりこんだ。

バカ。バカ。バカ。

このまま地底の底にもぐりこんでしまいたい。

布団の奥深くにしづくまつた沙雪の耳に、キュウン、と声がした。

布団にトンネルのよつな隙間を作つて外をのぞく。

すると、あゅうビセーに、ぐう太の切ない目があった。

ベットの端に足をかけるようにして、じかうをのぞいているらしく。

「ぐう太、おいで」

沙雪は手を伸ばすと、ぐう太を抱き上げベッドに載せた。

なぐさめてほしかったのだ。

だが、すぐにぐう太はベッドを飛び降りてしまった。

「ぐう太あ、なあにい？」

仕方なく身を起こした沙雪に、ぐう太はすかさずワードを咥えて持ってきた。

目がキラキラしている。

「散歩？」

沙雪は伸びをした。今日もいい天気らしい。

カーテン越しに見える陽は高いものの 夏の盛りよりはその位置は低くなっているらしい。

季節は確実に秋に向かっているのだ。

海水浴客がいなくなつたM浜を散歩したら、気持ちいいだろうと思ひだして、沙雪は布団を再び抱きしめる。

『家、M浜のまつだる』

昨日の松浦の声と。あの、夏休み最後の日の防波堤の夕陽が、鮮やかに蘇る。

松浦のヤツ。

覚えてたクセに……無視してたんだ。

そんな風に思いだすと、胸が苦しくなる。

そのくせ、甘酸っぱい切なさが胸から喉を超えて瞳の奥にまでこみあげてくれる。

ぐつ太はそんな沙雪の心中を知らずに、リードを咥えたまま、しつぽをパタパタ振つてこる。

早く行け、と催促しているのだ。

「……今田は黙田。お父さんと行きなさい

沙雪はやうこいつとまた布団にもぐつこんだ。

でも。

わざわざ、助けてくれた。

駅まで、送ってくれたんだ。

思ひ出すと体中の細胞がきゅっと縮むのがわかる。

その一つ一つが……こいつせいに吐き出した气体が肺に充満したよう
に……苦しくて。

沙雪はそっと溜息をつぐ。

チャイムが鳴り、同時に先生が入ってきた。

朝のHRだ。

てんでにしゃべっていた皆はあわてて席に戻った。

英語の教科書から顔をあげた沙雪は、廊下を松浦が走っていくのを
いち早く見つけた。

さすがに今日はゆっくりしそぎたのだろうか。

一足、とほこえ先生より遅いのははじめてだ。

後ろの引き戸をめがけて廊下を走る松浦と、ふいに田が合つた。

視線がピン、と張りつめて、沙雪の息が止まる。

しかし、それはほんの一瞬だった。

松浦は、特に表情を変えずに通り過ぎると、引き戸を開けた。

と、そのとき。

「松浦」

先生が、呼び止めた。

松浦は教室の後ろで立ち止まつていた。

沙雪は他の者のように興味本位で振り返ることができない。

「これが終わったら、職員室に来なさい」

「……ハイ」

松浦の返事、そして椅子を引く音。

沙雪は息をこらして、背中で聞きとつていた。

まもなく朝のＨＲは終わり、松浦は先生に言われたとおり素直に出て行つた。

「なんだろうねー。朝から呼び出しつて」

「補習来ないから注意されるんじゃない?」

沙雪は松浦の背中を見送りながら、アツ「たちが噂するのを聞いて

いた。

しかし……それきり、1時限目がはじまつても、松浦は教室に戻つてこなかつた。

お弁当を食べた後、レイコが9組からわざわざ来てくれた。

本当は、学食で落ち合つてもよかつたんだけれど、あそこには杉本が来るかもしれない。

彼と顔をあわせる勇氣は、まだない。

「なに、まだ落ち込んでるん?」

と紙パックに入ったアップルジュースを『おじつだよん』と言ひながら差し出してくれた。

沙雪はそれを受け取りながら、あいまいにうなづいた。

レイコはつかない沙雪を、あの『トートの後遺症と勘違い』している。

本当は、違つ。

沙雪の表情を重いものにしている犯人は、後ろの窓際の空席。

松浦は、3时限が終わって、昼休みになつても戻つてこなかつた。

クラスメートたち ことに女子 も気になるところ。

「じつしたんだね

ところれれやきがこつも教室のじいかで聞こえたよつだつた。

と。

「あれー、古田。どうしたの？」

レイコが戸口に向かつて声をあげた。

つられて顔をあげた沙雪は、やや険しい顔の古田と目があった。

古田と、バスケ部だろうか、背の高い男子がもう一人、引き戸のところに立っていた。

「三次さん、ちょっとといい？」

声は優しいけれど、断れない雰囲気。

教室の外へと促す所をみると、おそらく人に聞かれたくない話。

杉本のことだらうか。抗えない雰囲気には沙雪は立ち上がりながらも身を固くする。

と。そのとき。

沙雪とすれ違うよつに、クラスの男子一人があわただしく入ってきた。

「大変、大変だ！」

「松浦クン、学校謹慎くらつてるんだとよー。」

男子の声は、まるで教室中の皆に聞かせるよくなだ声だった。

ちなみに学校謹慎とは、学校に登校しつつも、生徒指導室など一日中隔離されて自習するという停学の一歩前の処分である。

「朝から生徒指導室だつて」

「えー？ 何やらかしたの？」

男子のまわりに皆がわらわらと集まつてくる。

「こ」は進学校だけあって『謹慎処分』などと云う単語を聞く「こ」はめつたにない。

それだけにクラスの皆は興味津々なのだ。

「なんかー、無断でバイトしてたのがばれたらしー」

「ええー！ バイト」

「なんだばれたんだるー」

突つ立つていた沙雪は、それを聞いてまさかと思った。

古田を振り返る。

案の定 古田は、沙雪をうながした。

「 もへじや 」

古田は切り出した。

古田ともう一人 きくとバスケ部の副キャプテンだといふ。合図には来てなかつた人だ は沙雪を屋上に続く階段の入口に連れ出した。

屋上は施錠されているから、ほとんど誰も来ない。

つまり静かに話ができるといつわけだ。

古田の様子が 視線は厳しいけれど、声はあくまでも気を遣つてくれている感じなのと、心配したレイコが付き添つてくれたから、ここまで付いてきた沙雪である。

だけど、こんな緊迫した状況ははじめてだ。

何を聞いただされるのだろうか。

「松浦クンのバイト、先生に話したの、三次さんじゃないよね

じりじり。

反射的に首を横に振る。

と同時に、わかつたことがある。

松浦がバイトをしてこむ」とを、学校に誰かがチクつた。

そして、沙雪が松浦がバイトしている店に行つたことを、古田は知つてゐる。

もうひん沙雪でも。

校則でバイトが禁止されてるのは、知つてゐる。

だけど、チクるなんて考へる以前に、あのときはバイトをしている松浦と、校則とを照らし合わせる余裕なんかまるでなかつた……。

「違つ」

言葉がやつと出つた。声がかすれていのがわかる。

自分がじやない。

自分が松浦をチクるわけがない。

松浦に助けてもらつたのに、どうしてそんなことをするだらうか……。

沙雪は必死に首を振つた。

古田は　沙雪の答への内容よつも、あきらかにその態度を見ていたようだつた。

視線が一気に柔らかくなると、深くうなづいた。

「やつぱり？」「やつぱりやうか、そりだよな」

やつぱり？

つまり、最初から沙雪がチクつたとは思われていなかつたんだろつか。

……それにしてもどうして、沙雪が松浦の店にこつたことを、古田が知つてゐるのだろう。

「やつぱり、杉本だる」

副キャラクターが古田こなれやく。

やつぱり、とこひことせ。

沙雪と杉本が土曜日にデートしたことを知つてゐる？

杉本はもしかして、バスケ部のメンバーに沙雪とのデートのことを逐一話したのではないだろうか。

なぜか白痴げに話している様子が頭に浮かんだ。

もしかして、キスのこともすっかり話してしまつたんだろうか。

湧きだしてきた嫌なフラッシュバックに、沙雪は胸がつまるのを覚えた。

「ねーねー。てかなんでそもそも、サコがチクつたなんていうの？」

「ここ」レイコが声にかかる。あれに助け舟だ。

古田は眉毛を下げて、申し訳なさうな顔になつた。

「いや…… わ、土曜日に古田に三次さんが来たつて、松浦クンが言つてたから」

古田と松浦は、思つたよつずと仲がいいらしい。

休みだつた昨日も連絡をとりあつほど。

それより…… 松浦が自分の話をした。

そんな些細なことに沙雪の心臓は存在を主張し始める。

それが本題じゃないの?」。

松浦の口が、沙雪を語つた。

どんなふう?」。

沙雪の胸はさわづかとは逆の理由で、苦しきなつてこむ。

「でもわー。松浦クンの店には、サコと一緒に杉本も行つたんでしょ。チクつたのは杉本でまつじやん」

レイコはさけずかと犯人を名指しした。

「うん…… たぶん、そなんだうつねだ」

古田は嘔こよびんだ。

杉本が松浦のバイトをチクつたとすれば、あのとき邪魔されたことの仕返しだらうか……。

「……あの。松浦くんはどれくらい謹慎になるの?」

しばらくの沈黙のあと、沙雪は思に切つて聞いてみた。

今回、松浦が学校謹慎処分をくらった原因の、半分くらいは自分のせい。

沙雪にはわかつていた。

だって、沙雪のことで杉本に恨みをかわなかつたら、こんな風にチクられることはなかつたのだから。

「んー。普通だつたら1週間学校謹慎 + 放課後1時間草むしり1ヶ月、あたりだと思つけど……」

でも、転校してきたばかりだから、校則よくわかつてなかつたって言い訳できるかもしねえ、と古田は答えた。

しかしそうに「あ、でも」と向き直る。

「『めんね。疑つて。……松浦クンが捕まつたのは三三さんせいじゃないのはわかつたから、気にしないで』

そんな風にあわててフォローを入れるところを見ると、沙雪はつづかり泣きそうな顔を見せていたのかもしねえ。

無防備な自分を見せていたことに気づいた沙雪はあわてて下を向いた。

そんな沙雪に、さりに古田は付け足した。

「……それにあいつ、三次さんが店に来たこと話してるとか、なんか楽しそうだったし」

しかし、松浦の処分内容は、古田の樂觀をはずれた。

今までの前例どおりに つまり学校謹慎1週間と、放課後の草むしり1カ月に決定したのだった。

学校のはずれにある図書室の窓からは裏庭が見える。

庭というよりは敷地の隙間、といったほつがいのような狭い幅。

威勢の良い運動部の掛け声も、色づき始めた午後の光も届かないひつそりとした暗い地面の上に、松浦はしゃがんで草をむしっていた。

年中湿つて固い土に生える草は、これまた根が深いらしい。あまり1か所から動かない。

一心に根を掘り起こしているのだろうか。

松浦のよつこ……手足の長いイケメンが土掘りしているのは、本当に似合わなくて。

それはとてもみじめな姿に見えた。

自分のせい。

最初の日。

偶然その日の放課後にあつた図書委員会の都合で
図書室の窓から
彼を見つけた沙雪は胸が痛んだ。

以来、今日も沙雪は 罪の意識から図書室に来て、彼の背中を見下ろしていた。

図書委員の今週の当番を引き受けたのはそのためだ。

沙雪は上のほうの……年に一人も読まないような本にハタキをかけながら、田の端で背中を丸めている松浦を追っていた。

松浦はじぐく眞面目に草を抜いているようだった。

他にやることもないような裏庭だから仕方がない。

普通だつたら中庭の雑草むしりをさせられるところを裏庭にそれでいるのは、彼が田立ちすぎるという先生の配慮だらう。

しかし昨日まで、その配慮はあまり意味をなしていなじょうだった。

松浦が学校謹慎と放課後の草むしりを命じられて3日間。

先生の田を盗むよつにして、草を抜く松浦の元へは女子がやつてきた。

あまり長い時間いると先生に見つかって怒られるから、少し言葉を交わして去つていいくだけのようだつたが、それにしても入れかわり立ち替わり、さまざまな女子が彼の元をこつそりと訪れてきた。

3～4人でつるんで現れて、彼が田をあげたとたんにキャーキャーと去つていく1年。

建物の壁に寄りかかるよつにして、大胆にも 十分ほど会話を交わしていく3年。

ランニング途中だらうが、部活中のジャージ姿の女子。

そしてアッシュカラ、クラスの女子。

数人で彼を囲むようにしゃがみこんで、親しげにしゃべりながら足もとの草をぶちぶちと抜く。

いつやって見てみると、松浦は案外愛想がいい。

自分から盛り上げるわけではないが、女子に囲まれて照れるでなく、じくじく自然に受け答えしているようだ。

図書室からは、その楽しげなようすまでは見えなかつたけれど。

沙雪はなぜか苦しげなつて図書室の窓から離れた。

だけど今日、4回目。木曜日。

今日は誰も松浦の元を訪れない。

もしかしたら1階の窓から先生が監視しているのかもしれない。

松浦は草をむしりながら、ときどき腕を振り払つようである。

そつかと思つとひしゃんと半そでから出た腕を叩いてくる。

あつヒヤブ蚊でもいるのだな。

そつやつてこるとやつぱつみじめで、沙雪は罪の意識を感じる。

沙雪は松浦に謝るべきか、レイコに相談してみた。

レイコには土曜日のことを話している。ファーストキス以外のこと

は。

「サコが言いつけたわけじゃないんだし。来週、謹慎が解けてからでいいんじゃない?」

「でも……」

レイコの答えに沙雪は納得できなかつた。

沙雪が言いつけたわけではないけれど。杉本がチクつたのは沙雪のせいかもしねりない。

現に杉本はあれから廊下ですれ違つても、まるで知らない人のような態度を取る。

沙雪としては、そうしてくれてむしろ歓迎でもあるけれど、だけど松浦のことを、そしてキスのことを思つ出すと腹立たしい。

だけど、詰め寄るわけにもいかないし、ビリするのもできない。

それに。

土曜の夜、酔つ払つてた沙雪を駅まで送つてもりつたのにお礼も言つてない。

月曜日の朝から松浦は謹慎に入っているから、顔を合わすチャンスがないのだ。

「メアドとか知つてたらねえ……」

レイコがいつ。本当にそつだ。

松浦と同じ中学だったという古田に頼んで、松浦のメールアドレスを聞き出せないだろうか、とも思いついた。
だけど。

詳しい事情を話していない古田から何か誤解を受けるのは嫌だつた。

朝は登校時間が違つし、夕方はいつのまにかいなくなつている。

そんなわけで沙雪は、今日も何も言えないまま、図書室の窓から松浦の背中を目の端で意識するだけだった。

沙雪は窓に沿つて置かれた低い本棚の上を雑巾で拭いていた。

「三次さん。それくらいで終わつていわよ」

司書の女性が声をかけてくれる。だが、沙雪はひとせり一寧に雑巾をかけていた。

この作業をしていれば、「」く自然に松浦を眺められるから。

松浦は、図書室の真下で草抜きをしていました。

真黒に見える地面の中で、彼の半そでシャツは紫色に浮かび上がる
ようだからすぐにわかる。

と。

ふいに松浦が顔をあげた。

のぞきこんでいた沙雪は思わず心臓が止まるかと思った。

もはや、知らんふりはできない体勢。

心臓が止まつて行き場がなくなつた血が、カツと顔に集まつてぐる
のがわかる。

行動に迷つた沙雪は、ペコリと頭を下げた。

同級生にする行動じゃない、とすぐに後悔したが、それ以外思いつ
かなかつたから仕方ない。

松浦は立ち上ると、同じようにペコリと頭を下げた。

その顔にはわずかに笑みが浮かんでいて……だけどホッとしたのは
一瞬で、沙雪はとまどつた。

今度は、止まつていた心臓がドキドキと体中を震わせはじめたから
だ。

でも、松浦から田を離せない。

松浦はキヨロキヨロとあたりを見渡すと、

「三次さん」

と下から手招きした。

12 処分 3（後書き）

休載のお詫び

先日、週1程度の不定期更新と申し上げておりましたが、企画運営ならびに企画用新連載で、こちらを更新するのが難しくなつてしましました。

構想は頭の中にあるのですが、小説として文章にするには、その世界に全力で没入しなくてはなりません。

ただ、私の頭の粗悪な性質および時間のなさより、日替わりでまったく違う世界に没入するのはとても困難だといつことがわかりました。

本来ならば先に書き始めたこちらを完結させてから、新連載を書かなくてはならないことは百も承知なのですが、多くの人が関わっている企画のほうも成功させなくてはなりません。

そんなわけで企画を開催している5月までの間、こちらは基本的に休載させていただきます。

楽しみにされていた読者各位には大変申し訳ないですが、なにとぞご了承いただければと思います。

ただし、必ず復帰することを約束させてください。

まだ、序盤ではありますが、ラストまで話は決まつてるので、ぜひ完成させたいと思つております。

復帰の際には、また読んでいただけると嬉しいです。

また、作風はまるで違いますが、3／25より始まる企画用新連載
「失ったもの、守るべきもの」をお読みいただると大変ありがとうございます。

それではよろしくお願ひいたします。

ぴよ 拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0312d/>

恋のあとさき 追いかけてる

2010年10月10日14時33分発行